

巨石文化の国際会議

韓国漢陽大学の金秉模教授から、ユネスコ主催でのシンポジウムを開催するので、会議に出席しないかという手紙を受け取ったのは、ちょうど共通一次試験の日であった。それによると、2月25日から4日間ソウルで、アジア各国の学者を招聘し、巨石文化の諸相を検討して相互の共通点を探り出そうとする企画であり、私に日本の巨石文化につき発表してほしいとのことであった。巨石文化というのは文字通り大きな石を使って墓や記念碑を建造するものであり、エジプトのピラミッドやオベリスク、ヨーロッパのドルメンなどが著名である。ナターシャ・キンスキー主演で映画化されたトーマス・ハーディーの小説「テス」の最後の場面、夕日にシルエットで浮かぶ石造建造物といったほうが、普通の人にはわかりやすいかもしれない。アジア各地にもこれと同様な建築物があり、日本にも小規模ながら九州と東日本にみることができる。

日本をはじめ東アジア各地の墓は地下に構築され、また地上につくられる古墳も土や石で覆われて全体を見通せないのに対して、大きなむき出しの石が、地上に高く突き出ている姿になんともいえぬ魅力を感じ、大学院生の頃から東アジアの支石墓につき研究を行い、それについての論考も少々発表したことがあった。それが金教授の眼にとまったのであろうか。学年末の試験やその他もろもろの雑用の傍ら少しずつ資料を集め、スライドを作成し、慣れぬタイプを打って15ページほどの原稿を作ったのは2月中頃、言語学の縄田教授に添削を御願いとするとともに、教授から国際会議についてあれこれとレクチャーをうけて、ともかくも2月25日に熊本を発つことができた。

2月下旬ともなると韓国は寒さの緩む頃と思っていたので、さほどの防寒の準備はしていかなかったのだが、例の大寒波に遭遇した。寒波といっても日本の比ではない。なんと零下17℃でそれに極端に乾燥しているので、切りつけられるように寒さが肌に食い込むのである。それにビルの谷風が伴うので両耳がちぎれて飛んでゆきそうな感じすらしたのであった。もっとも、会議は最高級のホテルの中で行われたので、夜間の会場を移動する以外は、まったく快適そのものであった。

会議は25日の朝からすでに開始されており、ソウル到着後、昼食もそこそこに会議に出席した。午後はインド考古局のサーカー教授とマレーシアのチャンドーラ教授の発表があった。ところが悲しいかな、平素からヒアリングなどまったく意に介していなかったために、レジメをみながらやっと理解できる程度であり、発表前に各人が述べる口上などは、まったく聞き取れ

ない状態であった。翌26日は朝から私の発表。出発前縄田教授から聞いていたことを思い出しながら、こういう機会に発表できることは大変嬉しいと前置きして、いきなり本文にはいった。発表は40分ほど。その後60分ほどはスライドの説明。このスライドの説明が大変困った。というのは口頭発表の場合、時々原稿に眼をやることができるが、スライド上映中はまったくの場当たりの説明。それに日本の考古学研究は世界でも最高水準をゆくため、特殊に発達した日本語独特の表現が多くあって、なかなか英訳し難いのである。スライド説明が途切れるとすぐ次のシーンに変えられる。そこでまたうろたえる、という有様であった。それでもコーヒー・ブレイクの、サーカー教授が「パーフェクト・イングリッシュ」とほめてくれて、あれこれと意見を交換するうちに、やっとどうにか英語で意思を通じることができるようになってきた。

アジア各地の学者の多くは、たいてい4、5年イギリスやアメリカに留学して博士の学位を取得するから、ほとんどなにの抵抗もなく会話ができる。そして大学教授ともなれば2、3ヶ国語を話せるのがあたりまえと思われているために、逆に英語が話せないのが不思議なくらいにしか思われていない。ところが我々が受けてきた教育は、まず、話すことよりも1ヶ国語でも多く読み取り、学国の研究者の考え方を身につけることに主眼が置かれていたので、どうも話すことは苦手で、苦痛すら感じるのが実情である。

27日には一日中江華島の支石墓を初めとする先史時代の遺跡を訪れ、遺物や遺構をみながらあれこれと意見を交換することができた。このときにはもう、軽い冗談を言うことができるようになり、お互いに普段とは違った人柄を知ることができるようになってきた。

国際会議に招待され発表を行い、また夜ごと、最高級のホテルでのフルコースのディナーにあずかるとはまったく予想だにしていなかったが、どうにか役目を終え、今度はフランスから招待されないかと思うこの頃である。

『熊大だより』第28号、1981年6月